ディスカッション成果 平成28年度　リトアニア派遣

1. ディスカッションの概要

日　付	9月22日～24日		
場　所	ヴィリニュス― ホテル「コンフォート」		
プログラム名	Discussion session		
テーマ	1日目：Knowledge enhancement 2日目：Contemporary culture 3日目：Environment		
参加者	日本青年14名、外国青年12名		
スケジュール	9月22日	14:00－14:30	アイスブレーキング
		14:30－16:00	リトアニア青年による文化･民俗･迷信に関するレクチャー
		16:00－16:30	ブレイク
		16:30－17:30	各国におけるユネスコ世界遺産についての発表準備
		17:30－18:00	日本人とリトアニア人に分かれて発表
	9月23日	9:00－ 9:45	各国の挨拶に関するロールプレイ、ディスカッション
		9:45－10:30	エチケットに関するロールプレイ、ディスカッション
		10:30－11:30	日本とリトアニアの就職活動についてディスカッション
		11:30－12:00	ブレイク
		12:30－13:00	就職活動についてのロールプレイ、プレゼンテーション　講評、総括
		14:00－14:20	テーマ"Do humans have right to commit suicide?"について、肯定派と否定派に分かれディベート準備開始
		14:20－16:30	社会的、法的、宗教的、倫理的側面を軸として準備、討議
		16:30－16:45	ブレイク
		16:45－17:45	外部から講師を招いて文化交流
		17:45－18:00	講評、総括
	9月24日	9:00－ 9:05	アイスブレーキング
		9:05－ 9:50	環境に優しいビジネスプランの考察①
		9:50－10:50	環境に優しいビジネスプランの考察②、発表準備
		10:50－11:00	発表

2. レクチャーの概要

テーマ	Knowledge enhancement
参加者	日本青年14名、外国青年9名
トピック	現実と迷信：日常生活におけるリトアニアの伝統的信仰

成　果

1. リトアニアの民俗

リトアニアは行政区画とは別に、文化的観点から五つの地方に分けられる。それぞれの地域に根付く独自の異なる文化すなわち民族衣装や建築、そして信仰などがある。また、全国的な文化として有名なものに、Mardi GrasとSutartinės が挙げられた。Mardi Grasは冬が過ぎ去り春の訪れを願う2月の伝統行事であり、Sutartinėsはユネスコの無形文化遺産にも指定された女性による多声音楽である。

2. リトアニアの迷信、文化

起床時に、ベッドから右足を先に出すと良い。テーブルナイフを落とすと、男性の来訪者があり、スプーンを落とすと、女性の来訪者がある。羊を飼う場所に虫がいると良い等多くの例が挙げられた。

日本青年とリトアニア青年によるディスカッション

→迷信が生まれる背景には、悪事を戒め、問題が起きるのを未然に防ぐ意図があるのではないか。

迷信からみる、美意識やマナーに関する考え方

リトアニアでは古くから美しい女性の条件として、白い肌、えくぼ、輝く長髪などがある。そこから、「ブラッシングして髪が抜けたら誰かに想われている」「頭痛の原因は、鳥が髪の毛から巣を作るために集めているから」といった迷信が登場した。また、室内のマナーとして、「口笛を吹くと悪魔がやってくる」「席に着き、足を所在なく動かすと、そこには小さな悪魔がいる」といった迷信が生まれた。

3. 結論

迷信は地域の独自性を基に発達してきたものも多いが、迷信のグローバライゼーションともいえる世界共通のものも存在する。今後、迷信はますます普遍化が進むのだろうか。日本とリトアニアでも、類似したものが見られ興味深い。黒猫の不吉さ、塩をこぼすこと、鏡が割れることに関する迷信など。そしてリトアニアも日本も地域の多様性に富んだ伝統を保っている。

3. プレゼンテーションの概要

テーマ	Knowledge enhancement
参加者	日本青年14名、外国青年12名
トピック	日本とリトアニアの世界遺産
成　果	

さくらチーム（日本青年）とオークチーム（リトアニア青年）に分かれ、相手国の世界遺産の中から興味のあるものを発表した。

1. 日本青年の発表

・日本青年は有形文化遺産担当と無形文化遺産担当の2グループに分かれて発表した。前者は「クルシュー砂州」と「シュトルーヴェの測地弧」を、後者は「リトアニアの十字架の手工芸とその象徴」と「バルト地方の歌謡・舞踊フェスティバル」をテーマに選んだ。

・「リトアニアの十字架の手工芸とその象徴」では、派遣団が9月16日に十字架の丘を訪れた際に、圧倒的な十字架の数を目の当たりにした時の印象、その背景にある精巧な十字架を作る職人の技術力の高さと、その技術がこれからもインフォーマルな形で継承されていくであろうことを取り上げた。

・「バルト地方の歌謡・舞踊フェスティバル」は、バルト3国にまたがる文化遺産であり、リトアニアでは4年に1度大規模なフェスティバルが開催される。発表では何千人、何万人もの参加者が共に歌い、踊る迫力ある映像も鑑賞した。

・「クルシュー砂州」には、派遣団が9月14日に訪れたときに聞いた、大女ネリンガがそのエプロンで砂を運んで砂州を築いたという逸話が残っており、景勝地として多くの観光客が訪れる。一方、その景観を保護するための取組が絶え間なく続けられ、入場規制なども行われている。

・「シュトルーヴェの測地弧」は、ノルウェーからウクライナまで続く265箇所の三角点群を指し、そのうち34箇所が世界遺産に登録されている。この三角点群は、ロシアの天文学者シュトルーヴェが設置したものであり、地球の正確な大きさを測る上で多大な貢献をした。なおこの測量が行われたのとほぼ同時期の18世紀に日本では伊能忠敬が正確な日本地図を完成させている。

2. リトアニア青年の発表

・リトアニア青年が発表テーマに選んだ世界遺産は「小千谷縮と越後上布」と「姫路城」の二つ、それらに加えてまだ世界遺産ではないが、今後の登録に期待を込める意味で「大仙古墳」の三つであった。

・「越後上布」は新潟県南魚沼市、小千谷市を中心に生産される麻織物であり、縮織のものは「小千谷縮」と称される。発表中に閲覧した小千谷縮の製造過程のビデオが示すように、根気のいる長く細かい作業の積み重ねによって特一等級の織物が生まれる。

・「姫路城」は1993年に日本初の世界遺産として登録された。姫路城は築城以来、大規模な戦災にさらされることなく、江戸時代に建てられた天守閣はその美しい白亜の外観を保っている。

・「大仙古墳」は、大阪府堺市に位置する巨大な古墳である。埋葬者ははっきりしていないが、仁徳天皇の墳墓とされることが多い。その平面規模はピラミッドを凌ぐほどである。古墳は3～7世紀にかけて有力者の墓地として日本各地で築かれ、大仙古墳のような前方後円墳のほかに、円墳や方墳などの形状もある。

世界遺産についての発表をうけての感想

井岡　諒

日本青年によって発表されたリトアニアにおける文化遺産の中で、私が特に興味をいだいたのは「十字架の手工芸とその象徴」である。派遣団が9月16日にシャウレイの近くにある十字架の丘を訪れたとき、私はそこに立ち並ぶ何千もの十字架を見て圧倒された。その丘を訪れる人々が各々持ち寄った十字架の集合体としてその圧巻の景色が生まれたということ、その信仰が今もなお継続されているということにリトアニア人の生活がカトリックといかに強く結び付けられてきたのか、彼らの受難の歴史がどれほど信仰の力により救われてきたのかを痛感した。発表でも触れられていたが、この無数の十字架は、ソ連時代に2度にわたってブルドーザーで引き倒されている。しかし住民たちは一晩にして新しい十字架を打ち立て、信仰の命脈をつなげたのである。さらに職人たちがキリストの姿を心に描き、また、リトアニアがキリスト教を信仰する以前から広く受け入れられていた自然崇拝の時代の象徴である自然物と十字架を融合させたリトアニア独特の十字架を一心に作り続ける姿、その祈りが昇華して繊細な細工を生み出してきたことに思いを馳せると、一つ一つの十字架がこの国の精神性を表していると確信する。

また、リトアニア青年による日本の世界遺産の発表でとりわけ印象的であったのが「小千谷縮と越後上布」についてであった。日本人でも「小千谷縮と越後上布」が世界遺産に認定されていることを知る人は少ないのではないだろうか、なぜ私たちからすると一見目立たないこの織物を発表テーマに選んだのだろうか。注目すべきは、発表の際に流された小千谷縮の制作過程を映した動画で、麻から糸をより、紡ぎ、布を織るまでの大変に手間のかかる工程が細かく映されていたことである。彼らはその姿に、忍耐強く勤勉な日本人の美学を見出したのだろう。細かい作業を淡々と積み重ねていくことによって、息を呑むような美しい作品が仕上がる様子は、日本のものづくりを象徴しているとも言える。ただしリトアニア人が日本に対して抱くイメージと現実との乖離について、派遣中に意識させられる機会も多く、とりわけ上のような日本人像は広く浸透していると感じた。実際に日本人が外国人と比べて忍耐強く、勤勉である（あるいは働きすぎである）という差異を感じた経験はほとんどないが、少なくともこのイメージが日本人への信頼につながっているならば、先人たちの築いてきた信頼を失わないように、これからも日本人としての誇りを胸に行動していきたい。